

山崎郷土叢

No. 65

60. 4. 20

兵庫県宍粟郡
山崎町教育委員会内
山崎郷土研究会
電話②2000

近世初頭の山崎藩 (二十三)

島田 清

二、池田輝澄時代 (統二十二)

○ 輝澄の出府

寛永九年七月、幕府の召命を受けた池田輝澄は、急いで出府の用意をした。このときの記録は残っていない。しかし、駿府城十八万石を預けられるという内意を知らされているだけに、一段と緊張したことはいうまでもない。

大名が江戸に参府し、また、帰国することが定例的になるのは、いわゆる参勤交代制が確立してからで、その規定は寛永十二年(一六三五)の武家諸法度改正条例に見える。すなわち、その第二条に、大名は毎年四月を交代の時期とす、とあるのが

目次

- 一、近世初頭の山崎藩 (二十三) : : : 島田 清 : : 一
- 二、長水城の盛衰 (下) : : : : : 岩井忠彦 : : 六
- 三、津田九郎右衛門の殿中刃傷 (下) : 堀口春夫 : : 八
- 四、本多家文書「参考御系伝」からみた
山崎八幡神社蔵本多忠勝画像 : : 前田 昇 : : 十二
- 五、秋の旅日記 : : : : : : : 志水美好 : : 十五
- 六、叡山回顧 : : : : : : : 織金義雄 : : 十六
- 七、会長就任のあいさつ : : : : : 堀口春夫 : : 十七
- 役員名簿 : : : : : : : : : : : : : 十七
- 事務局だより : : : : : : : : : : : 二十

それである。

その後、寛永十九年(一六四二)に、譜代大名の交代期を二月、関東・東海道の譜代大名は九月と改定され、諸大名の一年定府、一年在国の制が定まった。もともと、関東の大名は半年交代、水戸家と役付大名は定府ということもあって、大名個々についてはいろいろのケースが見られる。池田輝澄が寛永九年特別の召命を受けたのは、こうした参勤交代制とは別箇のものであるが、行列をつくって道中することにかわりはない。

では、どのような行列を組み立てたのであろうか。記録がのこっていないのであるから、他の類例によって概要を想察することとしよう。

行列を組む第一段階は扈從者の決定である。石高によって、隨從の騎馬武者数は制限されている。騎馬武者というのは、行列の中核となり、計画・実施の萬般を取りしきるものであるから、心利きたる者、才覚ある者を選ばねばならぬ。戦国時代の武士は、槍一筋の武功を尊重されたが、元和偃武以降は、それ以上に、行政的手腕を要求された。道中における藩士たちの行儀・作法は、沿道の人びと、ならびに旅行者の目にまざまざとうつる。他の藩とも当然比較される。藩の首脳者は、事故を起こしたり、不評判を買うようなことがないよう、常に注意しておかねばならぬ。それだけに人選は骨が折れる。しかも、同列のものばかりでは都合が悪く、階級に上下があり、年令にも適当なちがいがあるのが望ましい。藩の規模が小さくなればなるほど人数が少なく、人材も少ないから、人選は、いっそう骨が折れることとなる。

人選が終ると、それぞれの担当職務をきめなければならぬ。全体の差配をするもの、すなわち、道中の最高責任者がまず任命される。続いて、経費の出納を担当する会計方がきめられる。さらに、涉外係を定めなければならぬ。会計は内部の問題であるが、「涉外」は文字どおり外部との交渉である。城下を通るときは、城主への挨拶など、気骨の折れることおびただしい。

道中をしていて、何がもつともたいせつかというところ、行列がスムーズに進むことである。これには、宿場、宿場における人馬調達と宿舎割当が関連する。宿駅にはどこにも問屋があつて人馬調達に当っているもので、必要な人足と駄馬を確保するよう、あらかじめ交渉しておかねばならぬ。宿駅では、常時、或数の人足・駄馬を用意しているが、一般旅行者が輻湊したとき、或は、他の大名行列とちがったときなど、需給のバランスを崩すことがある。人馬調達ができなければ、行列は、それができらるまで宿所に泊っておらねばならず、無駄な失費をかきねるうえに、大名としての威信をも疵つける。宿舎の配分も同様である。大名の泊る本陣は各宿場とも一応ととのつていられるけれども、藩士たちの宿所には、一般旅宿だけでなく、民家の借り上げもおこなわれる。そうしたときは何かと不便が多く、不都合なこともおこりやすい。こうしたことを未然に防ぎ、遺漏なく取り運ぶために、藩からは、山崎出発前に

時計・ぬがね・宝石

津村時計店

中央通り・TEL②0355

依頼の使者を出す。江戸時代も年代が降ると、「常宿」として特約する本陣ができ、「例年のとおり」で用件を果すこととなるが、まだ、寛永の初年では、そこまでの馴れができていない。それだけに、引率者の智慧・才覚が求められた。

当時の道路は、道幅がたいへん狭い。国鉄山陽本線と並行して走る国道二号線は、江戸時代の筑紫街道に、明治になってから付けた名だ。大正・昭和と時代が進むにつれて拡幅されたり、改修されたりしていちじるしく変貌したが、付け替えなどのあるところでは、昔のままの姿をのこしているところがある。それをみると、その狭さがわかる。行列がすれちがうことなど、到底できない。行きあった場合は、どちらかが適当なところで待ちあわせ、一方が通過してから進まねばならぬ。行列の指揮者は、あらかじめ出している先見（先見）の者から対行者の有無を連絡させ、それによってあらかじめ待避し、対処せねばならなかった。

道中における喧嘩もしばしば起きる。元和・寛永ごろは戦国の余風が強く、一般に殺伐であった。人の集る宿場では、外部のものとのトラブルも起きた。もちろん、藩内のもの同志の喧嘩もある。出発前に「道中心得」が申渡されたのはこうしたことのために、引率責任者の心労はなみたいでなかった。

では、山崎から江戸まで、どのような宿場があり、どう宿泊と休憩を重ねて進んだのであろうか。

山崎を出発するときは、家中の盛大な見送りを受ける。大手

門を出、城下（じょうした）の平野を南下しながら振りかえると、段丘の上にひろがる山崎城の櫓と石垣がたのもしい。やがて道は東へ折れ、船元の渡し場に着く。藩の首脳部と町人頭は、ここで挨拶を述べ、引きかえす。

用意された船で揖保川を渡り、須賀からゆるやかな坂を越えて安志へ。輝澄時代は、まだ安志藩ができていないから素通りし、南方の林田に出る。ここまでが四里で、半日行程。林田には建部内匠頭政長の陣屋がある。挨拶の使を出し、本陣に入って休憩、昼食する。

ここを出ると間もなく追分。これまで通ってきたのは因幡街道で、ここで、作州街道と逢う。いいかえると、因幡街道と作州街道は、姫路を出てこの追分にくるまでひとつの道で、ここから分岐するのである。追分の次は石倉、そして、揖保・飾磨の郡境にある峠を越すと飾西に着く。ここは、姫路藩本多家十五万石の領内だ。青山から夢前川を渡り、手野に出る。巍然としてそびえる姫路城が、街道を圧して眺められた。

このときの姫路城主は、將軍秀忠の親任あつい本多美濃守忠政。まだ、「大老」という職制ができていなかったため、特に「本多の間」という一室をもらい、秀忠の側近として庶政に参与していた。後世、「大老職の鼻祖」といわれている。大阪落城のとき、坂崎出羽守が助けた千姫を嫡子忠刻の室に貰い受け、「武蔵野御殿」と呼ばれる美しい屋敷に住まわせていたが、この千姫の持参金が十萬石というのであるから驚かされる。この

健康づくりの相談が気軽にできる店

ごころ薬局

薬剤師 岸本八重子
岸本弘子

山崎町東和通り・☎(07906)2-1190

ころの本多忠政は、飛ぶ鳥も落すいきおいで、西国探題の要職についていた。

城下は、こうした本多家の勢力を反映して賑わっていた。輝澄は、挨拶に、特別に心をくばったことであろう。

城下の本陣は、大手の中ノ門前にある、国府寺家、脇本陣はその隣の合田家である。一行

は、これらの家に泊ったこととおもわれる。山崎より林田まで四里、林田より姫路までもだいたいそれくらいある。このころの旅は、一日八里を標準としたもので、年配のものたちは、かなりの疲労を覚えたにちがいない。

姫路を出ると市川を渡る。ついで、加古川を渡らねばならぬ。江戸時代には、両川とも橋をかけていなかった。一般の旅行者も、大名の行列も、みな、船で渡らねばならぬ。こうした場合も、いちいち交渉し、用意させるわけであるから、道中の骨折りは察するにあまりがある。

加古川宿には、中谷という本陣が寺家町にあった。ここで少

休止、昼食したのち、再び道中を続け、明石城下まで行く。明石の藩主小笠原忠政（のち忠真）は本多忠政の女婿で十萬石を食んでいた。挨拶の使者を出し、昼食を兵庫、泊りを西宮とする。山崎を出てから、ここまで、まる三日。晴天に恵まれておればよいが、雨天に出逢うと、なかなか予定どおり進まない。万一、はげしい風雨にでも見舞われようものなら、道中をみあわせることも起こりかねない。

西宮を出ると、ふつう西国街道を進む。そして、郡山（茨木）または芥川（高槻）の宿で泊り、次の日に京都へ入る。古い王城の地は落ついた繁栄を見せている。慶長九年（一六〇四）四月二十九日、姫路城内で生まれた輝澄は、同十四年四月、母に伴われて駿府の家康に謁し、松平の称号を許された。まだ、六才の少年であったが、このとき、はじめて京都の町を見た。次は、大阪夏の役が起こった元和元年（一六一五）、輝澄は家康に従って伏見城に入り、六月六日に従五位下、石見守に叙任し、二十八日に宍粟郡三万八千石を与えられた。さらに、寛永三年（一六二六）、秀忠・家光が上洛したとき、扈從を命ぜられて京都へ上った。このときは、後水尾天皇が二条城へ行幸され、輝澄は馬術を上覧に供して面目をほどこしたわけで、京都はまことに馴染深い土地であった。しかし、このときが京都の見納めになるうとは、輝澄はじめ、誰ひとり思うものはなかった。京都から江戸までは、いわゆる東海道五十三次のとまりを重ねる。宿場の名と、その間距離を表示すると次のとおり。

23.	22.	21.	20.	19.	18.	17.	16.	15.	14.	13.	12.	11.	10.	9.	8.	7.	6.	5.	4.	3.	2.	1.
白須賀	二川	吉田	御油	赤坂	藤川	岡崎	池鯉附	鳴海	宮	桑名	四日市	石薬師	庄野	龜山	関	坂の下	土山	水口	石部	草津	大津	京
√	√	√	√	√	√	√	√	√	√	√	√	√	√	√	√	√	√	√	√	√	√	√
一里十六丁	一里半	二里二十二丁	十六丁	二里九丁	一里半	三里三十丁	二里三十丁	一里半	七里(海上舟渡し)	三里半	二里二十七丁	二十七丁	二里	一里半	一里半	二里半	二里二十九丁	三里十二丁	二里二十五丁	三里二十四丁	三里	

45.	44.	43.	42.	41.	40.	39.	38.	37.	36.	35.	34.	33.	32.	31.	30.	29.	28.	27.	26.	25.	24.
箱根	三島	沼津	原	吉原	蒲原	由井	興津	江尻	府中	鞠子	岡部	藤枝	島田	金谷	日坂	掛川	袋井	見付	浜松	舞坂	新居
√	√	√	√	√	√	√	√	√	√	√	√	√	√	√	√	√	√	√	√	√	√
三里二十八丁	一里半	一里半	三里六丁	二里三十丁(富士川舟渡し)	一里	一里十二丁	一里三丁	二里二十九丁	一里半(安倍川徒渡し)	二里	一里二十九丁	二里八丁	一里(大井川徒渡し)	二里	一里二十九丁	二里十六丁	一里半	四里四丁(天竜川舟渡し)	二里三十丁	一里(湖上舟渡し)	一里二十六丁

55. 54. 53. 52. 51. 50. 49. 48. 47. 46.

日本橋	品川	川崎	神奈川	程ヶ谷	戸塚	藤沢	平塚	大磯	小田原
-----	----	----	-----	-----	----	----	----	----	-----

▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

二里	二里半 (六郷川舟渡し)	二里半	一里九丁	二里九丁	一里三十丁	三里半 (馬入川舟渡し)	二十七丁	四里	四里八丁 (箱根関所)
----	-----------------	-----	------	------	-------	-----------------	------	----	----------------

長水城の盛衰(下)

岩井忠彦

播磨が、織田と毛利の対立の最前線にあったという地政学的現実には、無視できない。しかし、同じ播磨でも小寺官兵衛や赤松広秀のように戦わずに秀吉に降った城主も少なくはないのである。にもかかわらず、長水城は、播磨にあって最後まで織田氏に抵抗を試み、悲劇的な結末を迎えた。

長水城が秀吉軍との合戦を決意した原因として、『長水軍記』は、まず宇野氏と、秀吉の参謀小寺(黒田)官兵衛とが領地をめぐってしばしば対立していたことを挙げる。さらに、播磨に

入った秀吉から帰参の要請をうけた宇野政頼が、天正八年三月二十七日、姫路にあった秀吉の本陣に向向したところ、秀吉が暮に熱中して会おうとしなかった。そのため、政頼は「立腹シテ良從引連レ」帰城した。一方、秀吉の幕下では「羽柴小市郎秀長・谷大膳清好兩人、御前ニ出テ宣ヒケルハ、政頼ハ公ノ出給ハザルヲ見テ暇モ申サズ帰り候。早ク攻メタマハズンバ必後ノ禍ナラント宣ヒケレバ……」と、感情的な行き違いが合戦の原因とする。話としては大変面白いが、一城の命運を賭けた戦いの原因とするにはいかにも弱い。

片岡醇徳は、合戦の原因を宇野氏の資質に求め、彼が時代の変化を知らぬ守旧的な人物であったとする。

これは、おそらく正しい評価であろう。三木城の別所氏にしてもそうであるが、彼らの行動を「反骨の精神」ととらえることは正確な評価ではあるまい。大局的な歴史の流れについての見方を、宇野氏が持っていたとは考え難いのである。毛利氏の

株式会社

安井書店

6 粟郡山崎町山崎90
TEL 山崎(2)0700(代)

援助に対する期待もあったであろうが、これもまた判断の誤りといふべきであろう。

しかし、そのような宇野氏であっても、当時の織田方の動きと秀吉の大軍を目のあたりにして、それでも勝利を確信して戦いを始めたとは考え難い。播磨で最後まで反織田の立場を貫いた長水城や三木城には、今更後には退けぬ事情があったのではなからうか。

その事情とは、おそらく一向宗（浄土真宗）宗徒の動向である。

室町時代を通じて一向宗の勢力は農民・武士をまきこんで、

表装全般

…古いものを大切に…

表具師

松本永春堂

山崎町鹿沢本通り
TEL. 2-0122

全国的な広がりを示していた。ことに播磨ではその勢力が強く、すでに赤松政村の播磨支配を大いに妨げたのが一向一揆であった。その勢力は、各地の城主たちにとっても無視できぬものとなっていたのである。

英賀城の三木氏は、城主自身が一向衆徒であり、本願寺九世の実

如が下向して以来、播磨の一向宗の中心地となった（現在の亀山本徳寺は、このころの英賀御堂の後身である）。その領内に一向宗の信者が多かったことはいうまでもあるまい。

長水城に拠る宇野氏の所領についても同様である。ここでも一向宗の勢力が強かったことは、織田信長が一向宗の本山である石山本願寺への攻撃を開始すると、山崎からも本願寺救援に赴いていること（『西光寺順譜』）、当時、人々が身につけて戦ったという「六字の名号」が伝えられていること、などから明らかである。

しかも、長水城の宇野氏には、本願寺と対抗した織田氏や、領内の一向一揆と死闘を続けた徳川氏ほどの、近世的な家臣団の編成や経済体制の確立はできていなかった。であれば、一向宗との対立は所領支配の崩壊さえ意味する。しかも、一向宗は織田氏と仇敵の間柄である。長水城が反織田方に立たざるを得なかったのも、このあたりに原因があったのではあるまいか。

楽市楽座が施行され、山崎に新しい町づくりが行われるとともに、鹿沢に領国支配のための平城が築かれるのは、長水落城後間もない時期である。長水城をはじめ播磨のいくつかの城を悲劇に終らせたものは、この地が都に近く、古くから発展していたために、その伝統の故に逆にそれが制約条件となって、城主の思想や領内支配の体制が、中世から近世への転換に遅れてしまったという、歴史の流れそのものに求めるべきかもしれない。

津田九郎右衛門の 殿中刃傷(下)

堀 口 春 夫

寛政八年十一月十二日、その日は城中大広場に於て家中の武士が多勢あい集って、藩主忠居を交えて様々な藩政を論じ合っている時であった。この時一人の藩士津田九郎右衛門が家老の佐藤善五右エ門に色々と詰問をはじめた。これに対し家老の善五右エ門の応答が疎略であり、あまりに高飛車であったので、

— 本のある生活を —

さつき書房

山崎町鹿沢 55-3
☎(07906) 2-4674

藩士九郎右エ門はその解答に満足できず次ぎ次ぎと食いきがって行った。(論争の内容は伝っていないので残念乍ら筆者も不明であるが) もはやこうなると二人は質疑応答では無く感情を交えた口論になつて行った。話が次第に激昂してくると九郎右衛門は興奮して善五

右衛門に詰め寄つた。九郎右衛門の言葉が上役に對し少々無礼になつてくると善五右衛門は彼をキツとにらみつけ、大声で「ひかえよ……九郎右エ門……御前の前をわきまえず無礼であろうぞ……」と大喝した。その声を浴びせられた九郎右衛門は遂にカッターとなつて「おのれ奸物……覚悟……」と言うが早いか、脇差の柄に手をかけ抜き打ちに善五右衛門めがけてサッーと斬りつけた。善五右衛門は思わず上半身をパッーというしろへ引いたが九郎右衛門の刀の切先が胸をかすめて膝頭にザックと切り込んだ。善五右衛門が「アッー」と驚き前へのめる瞬間、第二の太刀が彼の肩先深く斬り下げられた。突差の出来事に驚いた藩士達が九郎右衛門をうしろより抱き止め、その場にねじ伏せたが、それをご覧になつた藩主は、「九郎右エ門……そちら乱心致したか……」と一喝された。その時九郎右エ門ははつきりと「本性でござる」と答えた。と言う。(この本性で御座ると言つた言葉が後にわざわざいして彼は切腹の仕置をまぬがれなかつたと言う。もしこの時藩主の「乱心か……」の言葉に答えずだまつて暴れていたら彼は乱心者として或いは切腹をまぬかれ追放ぐらいで済んだかも知れないとあとで一同は言つたという。併し彼も武士であつた。真を偽ることは出来なかつた。又或いはもとより深く期するところがあつて覚悟の上でやつたことかも知れない。とにかく彼はその場に取おさえられ城内南の角矢倉に監禁された。家老善五右衛門の出血は多量であつた。早速典医の応急の処置を受け控えの間に下がつたが、

藩侯はあとで彼を見舞い、「善五右衛門、そちら老令ゆえ今宵はこの所に泊って充分養生せよ」と仰せられたが、彼は「何をもちまして、これくらい傷、御前のまえを血で汚した不届者お許し下されませ。最早や血も止まりました故、これにて下城させて頂きます」と申上げた。藩主は「では籠にて帰えれ」と申されたが、「籠はもったいのう御座ります。歩いて帰えりませ」と善五右衛門は言ったが、藩主は「主命じゃ籠に乗れ」と直ちに籠の用意をされたので、善五右衛門も主命なればとて籠に乗って下城した。ここで一寸津田九郎右衛門を分限帳で見ると、津田九郎右衛門、初め与之助または千蔵、宝暦七年養父津田清五郎の後を継ぐ。津田家は享保の初め頃津田千助の養子に安志家中より清五郎をもらい、一時倉橋清五郎と称したが、その跡を与之助が継ぎ、祖父の津田姓を名乗って津田九郎右衛門となった。与之助は岡橋孫三郎の実弟にて津田清五郎の養子となる。宝暦七年仲之助お取立明和五年お切米八石二人扶持寛政八年十一月十二日御殿中にて乱心、依って入牢、同年十二月二十二日仕置。と印るされてある。さて此の刃傷沙汰によって、速刻重臣たちは緊急会議を開き事件の処理を評議した。その結果、津田九郎右衛門は一担切腹とされたが、その後色々の意見が出てこれは喧嘩口論であるから両成敗されて然るべきで一方にのみ切腹とは片手落などと裁決はのびのびとなった。然し斬られた善五右衛門は四日後の十六日に遂に傷がもとで死んだので、これによって津田九郎右衛門は殺人となり、御前の前をわ

きまえず刃傷に及びしこと不届きなりと、いよいよ切腹にきまったのは十二月の半ばを過ぎた二十一日の日であった。早速その日の暮六ツ刻監禁の九郎右衛門と彼の家へ上意の趣きを達すべく御徒士目附役島田七郎右衛門に御墨付が渡された。(兇事のお達しは暮六ツ刻ときまり、吉事のお達しは明六ツ時ときまっていた古老談)

津田九郎右衛門の屋敷は中之町にあったが、其日はすぐさま目附役七郎右衛門が同家を訪れ、玄関先に立って「御上意」と呼ばわると、最早や既に九郎右衛門の妻女にもあらかた知れてい

たものか障子の中から「御役目御苦勞に存じ上げます。唯今衣服を着けかえる間暫くお待ち下さいませ」と奥に入り間もなく紋服を着けた妻女が出て来て敷台に下り神妙に手を着いた。すこしうなだれていたが真に落着いた態度であったと言う。

七郎右衛門は懐中よりお墨付を出すと静かに読み上げた。「御上意」

創業嘉永元年 きものと共に130余年
高級呉服の専門店



山崎町本町 (さつき通)
☎(07906) 2-1680代

津田九郎右衛門、此度殿中御広間に於て御前をもはばからず刃傷に及び候事、甚だもって不届至極、よって明日未の刻、城外桜の馬場に於て切腹申付くるものなり」寛政八年十二月二十一日」これに対し妻女は丁寧な頭を下げ、「此度主人九郎右衛門事、恐れ多くも御前の前に於て刃傷に及び候事誠に申訳なく皆々様をお騒せ申上げ何とも何とも申訳無く：：とさすがに気丈な妻女も嗚咽にむせび復唱の言葉が続かずその場に泣き伏し何度も何度も頭を下げた。目附役七郎右衛門も思わず貰い泣きをするところ、これをこらえて「いやいや御内儀、そなたの嘆げかれるのも無理はござらぬが、人の世の運命はいつ何時どのようなになるやらはかり知れませぬ。九郎右衛門殿がこの度の一件決して悪い風評ではござらぬ、下々の者がいづく御同情の程は真にことのほかで御座るぞ」となぐさめ、妻女が何卒よろしくお願い致しますと言う声をあとに早々と引上げてきたが、途々七郎右衛門も気の毒でしかたがなかつたと言う。そしてまたその翌日は役目柄九郎右衛門が切腹の場に検視役として立会はねばならなかつた。翌日になると朝早くより桜の馬場には杭を打ち、白い幕が張りめぐらされ、その中に馬の皮の敷物を敷いて、九郎右衛門の切腹の用意がなされた。その朝七郎右衛門の願によって仕置家老横井彦左衛門の内意を得て内々に九郎右衛門は妻女にひと目会わされた。九郎右衛門は角矢倉の板の間、冬とはいえござ一枚を敷きその上に端座して、さかやきはばうぼうと伸びひげも伸びほうだいにやつれた顔に目ばかりギョ

ロリとさせていたが、妻女が差し出す白装束を受け取ると、覚悟していたとは言えさすがに涙を浮べ嗚咽をこらえようとして脇を振り向いた。島田七郎右衛門はそっと表に出て二人の再会に遠慮した。表には番卒が六尺棒を握って立っていた。そして未の刻が近づくと九郎右衛門にとって最後の食事が運ばれた。武士の切腹の前に差し出される食事は、お菜は鯉の焼物にゴボウの味噌漬けでお櫃の蓋を盆がわりにして差出すのが定法といわれていた。津田九郎右衛門はこの最後の食事を、鯉の焼物に少しばかり箸をつけただけで軽く一ぱい食べ「島田殿、貴殿のお蔭で妻にまでひと目会わせて下されたことこの九郎右衛門泉下に行ってもご厚情の程忘却仕まつらぬ、と一礼して、妻が届けた死装束白の着物に白の麻袴を身につけ、

「島田殿御厚情に甘えて申訳け御座らぬが事のついでに剃刀をお借り願えまいか、あまりにもむさいひげをそり、見苦しい死に顔を見られたくないと存ずる、」

「いや見上げたお心が

外科・内科

山中医院

院長 山中陽一

山崎町西町・TEL ②0036

け、刃物は禁物なれど貴殿のお心懸に免じてお貸し申そう」と
 剃刃を取寄せ貸し与えるときれいに鬚を剃って元結いまで結び
 直し「これにて思い残すことは何もござらぬ」とにっこり笑っ
 たと言う。やがて検視役の奉行堀内堅太夫が訪れ「九郎右衛門
 殿時刻であるぞ」と告げたので九郎右衛門は静かに立って桜の
 馬場へと下りて行った。これが今生の見おさめかと歩ゆむ足ど
 りに桜のわくら葉が冬の冷い風にはらはらと散りかかり、九郎
 右衛門のやつれたうなじを見ていると何ともあわれでならな
 った。九郎右衛門が馬の皮の敷物に端座すると、小者が近づき
 「お心静かに：：」と言つて三方にのせた九寸五分の短刀を差
 した。片わらの床机にはいかめしい陣笠の検視役奉行堀内
 堅太夫と検視介添人御徒士目附役島田七郎右衛門の二人が並ん
 で腰をかけ、介錯人として足軽が一人反り身の強い白鞘の大刀
 を持つて控え、あと始末の小者が二人幕の外に控えた。検視奉
 行が「九郎右衛門殿：：：思いのこすことあらば何なりと申さ
 れよ、出来得る限りはお力になり申そう」と言つと、九郎右衛
 門は「かたじけなし。いまは何もござらぬ」と言つて口を結ん
 だ。奉行がうなづき、あごをしやくると、介錯人が立ち上り鞆
 をはらつて手杓で水をかけうしろに廻つた、九郎右衛門は袴の
 肩衣をぬぎ着物の襟首を内側に折り込み、静かに短刀を取り奉
 しようの紙を巻き、従容として腹を切つた。実に見事な切腹で
 あつた。これを見た島田七郎右衛門は、「武士はかくありたき
 もの。武士は死に際が一番大切ぞ：：。いつ死を給わつても取

り乱ださず九郎右衛門の如く従容として死なねばならぬぞ」と
 永く永く子孫に伝えた。寛政八年十二月二十二日の事である。
 大雲寺の過去帳には「利剣真道信士」と戒名が印されている。
 戒名に剣の字が入つたのは、みな切腹の士のみであると言う。
 武士の切腹のあと御徒士目附役にはまだ残された仕事があつ
 た。昔の刑罰は実に厳しいもので、切腹した九郎右衛門の家族
 は領外追放ということになつた。つまり山崎藩の領内には置い
 てもらえないのである。九郎右衛門には妻と年老いた妻の母親
 と子供二人が居たが、彼等は早速荷物をまとめて九郎右衛門の
 位牌を抱いて領外へ立去らねばならなかつた。家中の内には親
 戚もあつたが、そこにも居ることが出来ないの、揖保川を越
 えると須賀沢は天領であつたので一まづ願寿寺に身を置かせて
 もらうこととなつた。目附役七郎右衛門は舟元の渡場まで見送
 り「お内儀、此度は何かと御氣の毒なことばかりでござつた。
 これもみな運命とおあきらめなされ、母者人もくれぐれもお体
 をおいといなされよ、願寿寺の住職には手紙をもつて充分お頼
 みしてあるから、あれにて一度落着かれ身の振方を考えられよ、
 他日また良き日の来ることを拙者も出来る限り計らい御子息の
 御帰参のかなう様御尽力致すであろう」といつて別れた。津田
 九郎右衛門を葬むつた墓は舟元にあつたがその子孫が其後帰参
 がかなつたものかどうかは知るよしもない。兎に角あわれな一
 件であつた。一方家老の佐藤善五右衛門は老年とて出血多量の
 為、事件の四日後不帰の客となつた。善五右衛門の墓は今も大

雲寺にあるが、戒名に「善守院一慣義翁居士」とあるは彼は信念の士で善いと思う改革はドシドシ押し進め豪直一慣の武士であった事が戒名がよく物語っている様である。

本多家文書「参考御系伝」からみた

山崎八幡神社蔵 本多忠勝画像

前田昇

本多家中興の祖といわれる本多忠勝の画像については、旧岡崎藩伝来（旧藩主家所蔵）の甲冑姿に珠数（最多角（いらい）の珠数）を掛けた画像が有名であるが、山崎八幡神社の宝物のなかにも、珠数は掛けていないが、これとほとんど変わらない本多忠勝の画像が残っている。

この八幡神社蔵忠勝画像の説明に先きだって、まず岡崎藩伝来の忠勝画像から考えてみることにする。

播州山崎藩本多家文書「参考御系伝」の第三巻には、旧岡崎藩伝来の画像について、つぎのように書かれている。（假名づり假名、句読点を付した。以下同じ）

「或る古筆記に云う。上総国大田喜良玄寺（古くは良信寺といはからいて、良）の什物に、忠勝の用ひし旗・物を初め、玄寺と改めしよし）の一軸あり。忠勝よりは五代の末、中務大輔忠国、良玄寺より乞い得て狩野某に模写させ、写しを

寺へ納め、古記一軸は永く子孫へ伝えて珍藏す。其の寿像の記は林道春（註、羅山）の筆なりとぞ。

同記に云う。尾張殿の御内人何某が秘藏なす忠勝の画像は、長篠合戦の時青竹の杖をつきて出陣なした趣きなりと、岡崎の藩士多門伝十郎が物語るなり。」

と。この記録によると、忠勝（西一六二）の画像は寿像として作られ、彼の晩年（死後には）、戦場で使用した旗や物具とともに、良玄寺へ納められていたものであることがわかる。しかし、この画像を長篠合戦（一五七八）のときのものとするのは疑問がある。「参考御系伝」にも、

「忠勝、其の昔十三才の時、初めて軍さなしてより、大小の戦ひ五十七度、遂に一度の不覚もとらず。また一所の手も負はず。武運目出度き功臣なれば、」

とあることからみても、忠勝二十八才のときの長篠合戦に、青竹の杖をついての出陣とは、理解できないのである。



それではいつごろに描かれたものであろうか。画像のおもぎしからみても、寿像の記を林道春（家康に召し出されたのは一六〇五年のこと）が書いたということからしても、さらに忠勝が大多喜一〇万石を領したのが一五九〇年から一六〇一年の間であったことなどから推察しても、忠勝五十三才の関ヶ原合戦（一六〇〇）のころと考えるのが妥当のように思われるがどうであろうか。

さて、旧山崎藩伝来で現在、山崎八幡神社所蔵の忠勝画像については、『参考御系伝』の第五巻、寛政四年（一七九二）の項に、つぎのような記載が見られる。

「祖先忠勝の画像の一軸を伝来す。さはれ、忠朝（註、忠勝父によく似る。大坂夏の陣で討死。）の像なりといふ者もありて、さだかならざるが故、家元忠頭（註、岡崎藩主）が方にあ

る忠勝の画像に引き合さんと思ひ、同年九月十一日、用人岩崎丈左衛門を使者として持ち遣はしぬ。扱、彼方の用人平岩左次右衛門に應對して一軸を渡ししかば、



忠頭初め宿老・用人・其外の役人まで一覽し給うて、中務の太輔、丈左衛門を近付け、我方にある画像と聊違へる所あれど映世靈神（註、享保一〇年山崎城内に神宇を創立して忠勝の靈を祭る。當時に上野ノ宮法親王より神号を下賜）の像に疑ひなし。此の旨かへりて主人に申せと直答して一軸を渡しし故、又左衛門受取って立ち帰る時、忠頭上下にて玄関の式台まで送り、宿老は縁取まで、用人・取次は白洲まで送りたり。

平岩左次右衛門が物語りに（岩崎又左衛門が）、忠頭が家にある忠勝の画像の一軸は、身を放たずして往来し、在江戸の時は森河宿の下邸に納め置き、祭日には小長持に入れ、足輕の宰領を付け、用人騎馬にて跡乗りし、日比谷御門内の上邸へ相迎ふ。此の時、大門を左右にひらき、取次・用人白洲まで、宿老書院へ供をなし、祭式を執り行ひ、下邸へ送り返す時も、取り計ひ方、前に同じとなん。

忠頭方にて取り扱ひの趣、又左衛門疾く人をして申し越したり。因て、彼方の例にならひて待ち受けぬ。」

と。この旧山崎藩伝来の画像が描かれた時代について、『参考御系伝』には「祖先忠勝の画像の一軸伝来す」とあるだけで、ほかに記載は見当らない。

山崎藩主本多家の家系は、忠勝（大多喜城主）の長男忠政（桑名城主）から、忠政の次男政朝（大喜多城主、竜野城主、姫路城主）から、忠政の次男政朝（忠政のあと、姫路城主）政朝の三男政信（郡山石）、そして忠英（山崎藩主）へと続いている。この家系や、岡崎・山崎両藩画像の酷似していること

食品の店

いまや

さつき通り4丁目
TEL②0169

などから、山崎藩伝来画像の起源を考えると、その一つは、忠勝が寿像を二枚作らせ、一枚を良玄寺に一枚を家に置き、家に置いた一枚が山崎藩に伝えられたとする考えと、いま一つには、忠勝の孫の政朝は始め大多喜領主（元和元年から三年まで、忠朝のあと）で、良玄寺とは深いかわりをもっており、

この政朝が良玄寺奉納の画像を横写させて、子孫に伝えたとも考えられる。

江戸時代に大名一三家・旗本四五家を数えた本多家一門のなかで、最も有力なものは平八郎忠勝の系統であり、これが一門の宗家のようにも言われていた。さきの御系伝の記録は、神格化された忠勝に対する一門の尊崇のようすをよく物語っている。忠勝像と確認された山崎藩伝来画像の、その後の取り扱いについて、「参考御系伝」にはつぎのように書かれているのである。

「同年（註、寛政四年）十月十八日映世霊神の祭日に付、小書院の

床へ画像の一軸をかけ、燈明寺（註、浅草の菩提寺）の法師を招き修法を執り行はせ、忠可本膳、子息監物忠居二膳、宿老焼物、用人・口取・燈明寺薄茶、用人皿菓子をそなへ、扱、忠可より末々の役人まで拝礼、終つて家士等に武術を試みさせて神霊をなぐさめたり。是を初めとして、年々正月・五月・九月・十月に祭式を執り行ふ。さはれ武術は十月にのみ試みさせぬ。」

と。じらい山崎藩江戸藩邸では忠勝画像を靈魂ある最高の宝として祭っていたことがわかる。

この画像が八幡神社に伝わった経緯は、「参考御系伝」の第五卷、寛政七年の項に、

「寛政七年六月十三日在所へ初のお暇なり。（中略）同二十三日江戸を発足し、七月七日山崎へ着きたり。扱、家に伝来の祖先忠勝の画像の一軸、二なき宝故、白鳥幸蔵に横写させ、燈明寺の法師に開眼させて江戸の邸に残し置き、伝来の一軸はこたび山崎へ携え、社内に納め置きぬ。」とある。

家宝の忠勝画像を災害から守るためでもあろうか、山崎藩六代目の藩主の忠居が、最初の国入りに際して山崎へ携えてきて、山崎城の本丸地内にあった、映世霊神社に納めたのである。

この神社は、幕末（天保期と）に山崎八幡神社境内の本殿西側に移され、さらに東側にかわり（明治初年ごろ）「本多神社」となった。そして、現在は八幡神社の末社として祭られている。

当然のこと、山崎城内の映世霊神社に納められていた忠勝画像も、社殿の移転によって八幡神社に移され、現在に至っているのである。

また、白鳥幸蔵（註、江戸藩士）に模写させて江戸に置かれていた画像も、いまでは山崎に移され（明治のはじめとか）、郷土館に保存されている。

昭和六〇年二月記

「参考御系伝」の提供や指導をいただいた堀口春夫氏に感謝いたします。

秋の旅行記

志水美好

郷土研究会の秋の旅行が例年より早く十月七日になり、春の高野山参詣をうけて今度は比叡山に詣ることになった。会員百二十六名がバスを連ねて八時に山崎を出発した。天気もよく高速道もすいていて、予定より早く十時半頃比叡山「東塔」に着いた。

大講堂に詣ってから延暦寺の中心である根本中堂に詣でる。徳川家光造営の大伽藍で国宝に指定されている。宝前には不滅の法灯として有名な三つの灯明が絶えることなく輝き続けている。根本中堂から急な石段を登って文珠楼に着く。連れを誘って急な階段を登り楼上に安置されている文珠菩薩を拝む。時間

を気にしながら少し奥まった戒壇院まで足をのばす。伝教大師の没後創建されたという由緒ある二層の建物がひっそりと建っていた。

釈迦堂や弁慶のいない堂のある「西塔」は残念ながら素通りして奥比叡ドライブウエーを走り、新西国十八番札所である「横川」に着く。親鸞上人や日蓮上人の絵伝が路傍に立ち並んでいる参道を進むと、舞台造りの総丹塗の立派なお堂が林の中に建っていた。昭和四十六年に復元再建された横川中堂である。更に足をのばして元三大師堂（四季講堂）にお詣りした。永平寺の道元禪師が得度された旧跡でもあるとか聞く。切角だからというので、私達宇原組は秘宝館を尋ね仏像・仏画・経典等の秘宝を大急ぎで見学した。九十九折のドライブウエーから琵琶湖の眺めを楽しみ乍ら山を下り、雄琴の湯元館でやっとおそい昼食をとった。

昼食後暫し休憩して坂本へ引返す。双巖院の小じんまりした門をくぐり、狭い部屋に大勢つめ合せて説明をお聞きした。桃山時代に造られた曲流廻遊式庭園ということである。築山のぼだい樹の根元に造られた仏足石を見てから、次の滋賀院門跡へと急いだ。穴太衆の積んだ堂々たる石垣の上に白土塀を繞らし、立派な椽皮葺唐門が天台座主の御座所にふさわしい雰囲気を持たせられている。渡辺了慶の襖絵のある宸殿、桃山時代の障壁画の飾られた広々とした二階書院・内仏殿・座主謁見の間等案内僧の方が丁寧に説明して下さった。宸殿の裏手山側に細長く



した。社殿の殆んどが国宝又は重要文化財に指定されているということ、壮嚴な中にも朱塗りのあてやかな建物が立ち並んでいる。有名な日吉の神輿が所々に展示されているのを眺めながら道を下り、東本宮にもお詣りして大急ぎでバスに戻った。

忙しい日程ではあったが、予定通りの見学を無事終え、三時半坂本を発って一路帰路につく。幸い天気にも恵まれ一同恙なく夕方六時頃山崎へ帰着できた。多数の会員の参加を得て、有意義な高野山・比叡山の参詣という春秋の研修旅行が出来ましたことを感謝しております。

立派な庭園があり、小堀遠州の作庭と伝えられるだけの見ごたえは充分である。ゆっくり説明を聞く間もなく早々に辞去。門前で記念写真を撮って引返した。

日吉大社へ是非参拝したいと思い、私ら数名は広い参道を急いで登る。大官川にかかる重要文化財の石橋を渡り、西本宮へ先ず参詣

叡山回顧

織 金 義 雄

弱冠一九才の伝教大師最澄は、靈境を求められ、けものみちを踏み分け、虚空蔵尾の地に草庵を結ばれました。一、二〇〇年後の昭和五九年一〇月七日、煙雲比叡の樹林とうたわれた、老杉の木漏れ陽の中を、かいくぐり駆け登る、快適なバスに身を委ね、夫婦談笑しながら、わずか二〇分余で、かつての女人牛馬結界の聖地、一乗止観院根本中堂のおんに額づくことができました。

あきらけく後の仏のみよまでも

光つたえよ法のともし火(ご詠歌)

天台不滅の法灯を仰ぐ時、思わず南無根本伝教大師福聚金剛を念じておりました。

奥比叡ドライブウェイの途中、幹事さんのご配慮で、親鸞聖人が二〇年間、不断念仏の行にお励みになられた、横川中堂首楞嚴院に訪で、南无阿弥陀仏の名号を称えつつ、聖人のご遺徳をお慕いし、ありがたい今日の御礼を申しあげました。

延暦寺は、二十数年前研修員として、朝に題目、夕に念仏の称名を聴きながら合宿した所です。同室の志賀の里任人のM・O氏は、私が播磨、但馬、摂津の国と転動を重ねている内に、精進が実り全国規模の人事で、北海道・留萌に単身赴任中、何

時かは同一任地で勤めたいと、同氏を偲びながら、想い出を妻と分かち合いました。

近江の湖夕なみ千鳥汝が鳴けば

心もしぬに古おもほゆ (万葉集)

老父を永年よく看取ってくれた妻に、また負担を強いる往復五時間余の通勤、心せわしい毎日ですが、お蔭様でさわやかな旅情を楽しませていただきました。

企画、お世話して下さいました役員の諸先生に、心より感謝申しあげます。

千代かけて世をば救いの鐘の音を

送り絶えせぬ比叡の山風 (ご詠歌)

会長就任のあいさつ

堀 口 春 夫

此度郷土研究会総会の役員改選によりまして、不肖私会長の指名を受けましてまことに恐縮かつとまどった次第で御座います。前会長の入江様は昭和八年発会以来の会員で旅行の世話や会員の連絡等又、会計を長年勤められ副会長、会長と順を追って数々の功績を残され、入江様こそ全くの適任者で又留任して頂く事と思っておりましたが、入江様は最近お体がすぐれず堅く御辞退なされましたので、併し乍ら後任にはまだまだ学識経験

豊かな方々が沢山おられますのに、私如き浅学非才の輩が会長と言う大任を仰せつかり、全くその重責を身に感ずる次第で御座います。私はまことに微力で気の付かない者で御座いますが、今後共皆様方のお力で何卒宜しく御指導御鞭撻を給わります様お願い申し上げます。簡単乍ら紙面を通して御挨拶にかえさせて頂きます。

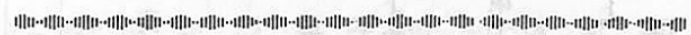
六〇年度役員

役職名	氏名	住所	TEL
名誉会長	谷口 巖		
顧問	前田 昇		
"	前野 四郎		
"	庄野 和夫		
"	伊藤 親保		
"	前田 連		
会長	堀口 春夫		
副会長	久保 寅夫		
"	長田 重男		
総務部長	福山 清一		
会報	大谷 司郎		
研修	志水 美好		
史跡	久保 寅夫		

事務局だより

- 一、会報の原稿をお寄せいただいた方に感謝申しあげます。どしどし原稿をお送り下さい。
- 二、史跡部の手によって近く「山崎町史跡めぐり」(仮称)という小冊子を発刊する予定です。一部二〇〇円にて会員の皆様にお願ひ申します。
- 三、春の研修旅行案内を会報に挿入しております。参加ご希望の方は早目にお申込み下さい。

山崎郷土研究会事務局
山崎町 安井清介宅



最新型カラー現像機導入
カラープリント・スピード仕上げ

良い品を・安く・安心して買える店

Specialty Camera Shop

コーエーカメラ

宍粟郡山崎町東鹿沢26-3 ☎2-2089

